

智猛並に法勇の求法行記について

諏訪義讓

(一) この二人の傳記は出三藏記集8高僧傳3に出て要點を擧げると次の如くである。

智猛 弘始六年發一同志十五人—波淪國を通る—陸路歸り—元嘉四年頃着—行傳あり。法勇 永初元年發—同行二十五人—波淪國通過不明—海路歸り—元嘉末年着—行傳あり。

波淪國とは Bolor で Gilgit 越を意味する。是れは求法に當つて如何なる進路で入竺したか知るに重要な地點である。行傳の名稱は是れだけでは不明であるが存在した事は察し得るであらう。處が同じ出三藏記集でも第八卷に二十卷泥洹の經記が出て其の下に『出智猛遊外國傳』と見え歷代三寶記の釋迦方志下に至ると『遊行外國傳』と明記されてゐる。隋書經籍志を始め唐志通典等には智猛の『遊行外傳一卷』と定められてしまつてゐる。又法勇の行傳は歷代三寶記10に『曇無竭外國傳五卷自述西域事』と傳へられ隋志に『外國傳五卷釋曇景撰』の記さるゝのに相違ない。曇景は曇勇の誤りで通典邊防典に『曇勇外國傳』と稱してゐるのに依つても傍證し得る。正に法勇の行記は『外國傳五卷』であつた。

二、扱てこの兩人の求法行記を問題にしたのは實は此の方面の權威者であつた小野玄妙博士が、昭和十一年ビタカ誌上に、『翻梵語』に出づる外國歷國傳の二者を智猛の外國傳、曇無竭

の歷國傳に定めておらるゝからである。如何にも博士がこの兩傳を發見し其處に見える單語の名詞を譯解して求法の行程を趾付けられた功績は認めてよい。併し博士の結論にあるやうに、『外國傳を智猛のものとし……第四卷は南印度から錫蘭に渡り更に西印度まで各地を遊歴した』と爲し『歷國傳を曇無竭のものとし……第四卷は錫蘭に渡つて海路を経て廣州に歸還した』と認めて其れで可なるものか。尠くも前項で僧傳隋志方志等から導き出した結果とは相容れない。尤も博士は初め歷代三寶記の記述で外國傳を曇無竭、歷國傳を智猛に當てゝみたが後刻、出三藏記集の記事に氣が付いて實際はその反對で外國傳が智猛の著作であり、歷國傳が曇無竭の撰述である事を知つたと説明されてゐる。如何にも推察の道程は同情するが、この際何よりも卷數に注意が拂われてゐない。もつと根本的に評すれば視野が狭く資料の範圍が佛教關係以外に及んでゐない。若し隋志唐志通典に眼を轉じてゐるなら智猛の外國傳一卷、曇無竭の外國傳五卷と定まつて早計な誤りは冒さないだらう。當然翻梵語の外國傳は曇無竭のもので歷國傳は他に求めてゆかねばならぬ羽目になる。

三、然らば歷國傳を如何に取扱うか。既に書誌學的立場をとつて隋志唐志等を窺えば、幸にも智猛法勇等の求法記と並んで『歷國傳二卷釋法盛撰』と名付くるものを見出す。この法盛は梁高僧傳二の曇無讖に僅かに附傳されてゐるのみであるが寶唱の名僧傳で補われる。佛教系は歷國傳四卷を採つてゐるが正しいと思ふ。翻梵語の歷國傳は四卷まで引用し錫蘭南海に終結を暗示して愈々確信を強めるであらう。